

会員紹介：加藤珠比さん

私の略歴



従事した仕事の内容

(株)東芝時代

東京外国語大学でスペイン語を学び、ラテンアメリカ地域研究を専攻し、南北問題、多国籍企業論などに興味を持ちました。卒業後(株)東芝に入り、海外援助関係の仕事ができる職場という希望がかない、日本の政府開発援助を中心に注文型の電子システムを輸出する海外営業部に配属され、部署の管理業務や空港管制装置の海外営業を担当しました。その海外出張時、街を歩いていますと、空港によって裨益を受ける人たちは富裕層のみだなという感覚になり、その頃感じていた「貧困とはどのように起こるんだろう」、それを勉強したうえで、「貧困層に直接裨益するような海外援助の仕事がしてみたい」と考え、海外留学を決意しました。

サセックス大学開発学修士課程留学時代

大学時代にヨーロッパへ1ヶ月半に及ぶ語学留学・旅行へは出ていましたが、長い留学生活は初めてで、その頃アジア系留学生も英国では少なく、その頃はアジア系では少数の日本人学生のみでした。2年間で修士課程を学ぶクラスは24人おり、国際的で、日本人は5人、ヨーロッパの人が多く、アフリカ、アジア、中南米などの順に多かったです。

英語力が不足する中で、英語をブラッシュアップしながらの1年目を過ごしました。しかし学期毎にペーパーを提出していきながら、英語が第2学期頃からよく聞こえ、読み、話せるようになってきました。大学の授業は学際的で、マクロ経済から政治学、人類学、統計学など多彩なクラスを擁し、たとえば同じマーケット（市場）についての授業を午前中は経済学の先生から、午後は人類学の先生から学ぶという、大変学際的なクラスで、掘って立つ学問によって随分見方が変わるのだなと感じました。

また、人が集中し、ビルや家屋が立ち並ぶ東京と違い、大学のあるブライトンの田園風景は静かで心休まる、勉強するのにとても良い環境で、このような環境で勉強できる幸せをかみしめながらの毎日でした。2年間のコースでしたので、1学年と2学年の間に Bangladesh Rural Advancement Committee (BRAC) のマイクロクレジットプログラムについて調査しました。 Bangladesh の農村に BRAC オフィサーと訪れたときには、オフィサーを含め、朝早くから働く農民たちの勤勉さに大変驚かされました。また、 Bangladesh 人は一様に、戦後復興して急速な経済成長を遂げた日本に対して、尊敬の念を持っていると言ってきてくれる人が多く、親日的で、友人宅にも何回かお邪魔させていただきました。 Bangladesh の調査データを基に、修士論文を書きました。修士課程中は、この調査以外、外国に行く時間が持てないほど、勉強に明け暮れました。



サセックス大学周辺の田園風景

UNDP「人間開発報告書室」時代

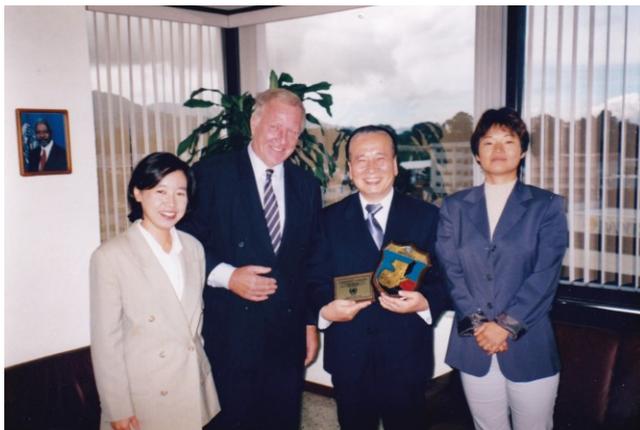
修士課程修了後、友人の紹介でニューヨークへ飛び、UNDP 本部の人間開発報告書室でインターンを始めました。仕事の内容は同報告書の統計部門のデータ収集や編集作業、また報告書本文部分ドラフトについて、編集会議などでコメントをする、というものでした。世界的に有名な報告書室であるだけに、役割も大きく、みんなきちんとその責任を担って仕事をされているように見受けました。室長（福田パー咲子さん）の机、部屋はいつも書類で埋もれており、こんなにたくさんのペーパーを読みながら報告書を書かれているのだなと、その処理能力、分析能力の高さに驚きました。オフィスも国際的で、世界中から集まってきており、活気に満ちていました。編集会議には、アマルティア・センさんやリチャード・ジョリーさんも訪れ、知的レベルが高く、中身の濃い議論が行われる編集会議となっていました。私は途中でインターンからコンサルタントとして雇っていただき、計8ヶ月を過ごしました。

私的にも多くの国内外の友人ができ、ニューヨークの生活を楽しむことができましたし、ボストンやワシントンにも旅行や出張で訪れました。その頃の交友関係の一部は今も続

いており、私の生活の彩となっています。

国連グアテマラ和平検証団時代

NY もやりがいがあり、楽しかったのですが、早くフィールドに出たいという思いから、求職活動を始め、職場で同僚のグアテマラ人に紹介され、国連ボランティアとして国連グアテマラ和平検証団に赴くことになりました。国連ボランティアは、サセックス大学同窓生から、「現場に近く」仕事ができると聞いていましたので、ぜひやりたいと思いました。社会経済監視員として、初め2年間は本部で保健分野の担当をしました。同検証団の任務は、1996年に国連の仲介で結ばれた13に及ぶ和平条約に基づき、履行状況の監視、および政策的助言を行うことでした。これらの条約は、中南米で最も長く36年間続いた内戦の原因は、マヤ民族への社会的差別にあったという分析から、彼らの人権、政治社会的権利の保護という観点から構成されています。保健分野では、ミレニアム開発目標のような乳幼児死亡率や妊産婦死亡率の目標の達成の他に、保健予算の増加、伝統的医療の認知などが主に政府に実施するよう求められていました。そのため、保健省や国際機関、また同検証団地方事務所からのデータなどを基に、監視報告をしていました。



国連グアテマラミッションで、国連ボランティア
終身名誉大使中田武仁さんと（右から2人目）

また、元ゲリラの代表の方と国内避難民の生活状況を確認する委員会で、政府と代表の方との仲介をしていました。3年目のコバン地方事務所では、担当分野である社会開発分野で現地学校、保健機関、住居などの訪問とともに、監視、政策的助言を地方政府に対して行いました。また、地方事務所はマヤの人たちの人権訴え窓口にもなっていたので、交代制で担当となり、24時間体制で、通訳の人と一緒に訴えがあったとき

は事務所に行って、訴えを聞き、政府の関連機関に連れていき、通訳をつけるなど適切な対応をしてもらうことを依頼し、ケースをフォローしたりしていました。また小さな事務所でしたので、全員総出で農民のデモ、リンチ、県知事への集団での訴えなどに、国の関連機関を支援する形で赴き、同僚が仲介をするという場面にも遭遇しました。治安が悪いと言われていましたが、個人的には1~2回のスリにあった程度で、問題なく住むことができました。

この3年間、長い内戦から立ち直り、平和の道へ進む新しい国造りをいろいろな角度から見る事ができて、大変勉強になったと考えています。グアテマラの人たちは歴史的な植民者からの逃避により山に住み、国としての独立獲得後も社会的差別を受けてきて、

内戦が起こり、その間大量虐殺があったといわれ、秘密墓地、暗殺など様々な事件があったとされています。家族を亡くした人々、家族が分かれて互いに戦った人々など、悲惨な人生を歩んだ人たちが多く、マヤの人々はあまり話そうとしません。そんな人たちに寄り添って、外国人としてでも何かできることがあればいいなと思いました。

JICA タンザニア事務所時代

PKO 部隊で世界を転々とするキャリアもあったのですが、私は開発を勉強したのだからと、開発機関への就職を希望していました。私の原点は貧困削減への興味から始まっており、また前からアフリカに行きたいと思っておりましたら、運よく JICA タンザニア事務所で貧困削減戦略のお手伝いをするポストに決まり、アフリカへ飛びました。そこで待っていたのは、中米よりもっと貧しい、けれど明るい人々の笑顔でした。そこでの仕事は、副大統領府貧困削減オフィスが行う、貧困削減戦略目標の進捗状況をモニタリングするという仕事への支援でした。モニタリング活動は国家統計調査・分析、行政データ収集、年次報告書の作成、報告内容の国民、政治家への啓蒙・普及などでした。援助協調の潮流の中で、セクターバスケットファンドにドナーがお金を出して、国家機関が行う活動をドナーが参加、技術的にも支援して行っていくというものでした。また当時、参加型、オーナーシップという言葉が使われ、戦略に関する議論に、NGOs や市民社会も参加していました。中央官庁、ドナー、市民社会の様々な人々と一緒に仕事をすることができて、やりがいがあり、楽しかったです。



統計局支援プロジェクト開始式典にて

私としては、統計局の能力向上支援のプロジェクトにかかわることができ、また年次貧困と人間開発報告書や参加型貧困アセスメント報告書などを作成するなど、様々な活動ができたのが経験となり、良かったと思っています。また 2000 年初めから、サブサハラアフリカ諸国では、英国、北欧諸国を中心に財政支援を行うという援助モダリティを用いた支援が中心になっていました。特にタンザニアはその援助協調の前衛的存在で、伝統的なプロジェクト型の支援をしていた

た日本は、そのモダリティの議論で、前者の中に入るべきかいなか日本と現地（タンザニア）の議論は別れていました。結局現地が説得し、一般財政支援（お金をタンザニア国庫に出す）にも拠出することが決まりました。その頃の一般財政支援に向けた議論では、長期的に支援して、途上国の政府の公共財政管理能力を向上させる支援をする、ということが唱えられていました。

個人的には、3 年弱の間で、貧困削減の現場、地方にあまり行けなかったのが残念でしたが、街に住むタンザニア人は、死が結構身近にあっても、明るく生き生きと暮らして

おり、そのしなやかでたくましい生き方に、多くの学ぶものがありました。

Overseas Development Institute/慢性的貧困調査センター時代

JICA タンザニア事務所時代に行っていた貧困に関する研究への支援、報告書の作成、編集をしていく中で、自ら貧困削減に係る研究を行いたいと考え、JICA の専門家個人養成研修というプログラムで、貧困削減戦略に係る研究を行っている英国のシンクタンクである Overseas Development Institute (ODI) に派遣されました。そこでは ODI が慢性的貧困調査センターと一緒にいる貧困削減戦略の慢性的貧困にかかる研究プロジェクトに参加することになりました。そこでの議論は慢性的貧困にかかる最先端の研究で、とても刺激になりました。また、そこで驚いたのは、裁量労働制がとられており、みなオフィスに來たり來なかつたりという感じでした。日本には新しかった時代です。ロンドンでの生活は2ヶ月あまりでしたが、ちょうど春でしたので、週末にはロンドン北部にある公園などを訪れ、イングリッシュガーデンを楽しんだりしました。



タンザニア農村女性へのインタビュー

私はタンザニア国別調査を担当することになり、タンザニアでの調査は以前の世帯データを入手していた国中部の3つの村落で参加型貧困調査を行い、慢性的貧困層を特定し、その世帯の状況や保健・HIV/AIDS セクター政策支援の状況を調べるというものでした。慢性的貧困な人たちは、病気がちで、HIV/AIDS 患者を家族に持つ人も貧困に陥り、その状況が続いていました。彼らには地方分権化により政策がうまく届いておらず、HIV/AIDS など分野横断的なセクターではとくに政策の調整・実施が難しいことがわかりました。初めて入る農村でしたので、不安もありましたが、現地の人たちと現地の状況、暮らしについて通訳を介しながらインタビューで直接に聞くことができ、その生活の様子を知ることができたことは良かったと思いました。

開発コンサルタント時代

日本に戻り、開発コンサルタントを始めました。主に JICA の技術協力プロジェクトの評価（事前、中間、終了時）などを担当しました。プロジェクトの分野は、農業・農村開発、参加型開発、女性のエンパワーメント、平和構築、職業訓練、水資源管理、防災など多岐にわたり、いろいろな国々を訪問する機会がありました。初めは評価を学ぶところから始めましたが、評価



地域住民とのプロジェクト計画ワークショップに向けた講義

の種類によって違う視点が必要なことや、様々なプロジェクトを知ることができて、面白く、やりがいを感じました。評価は実施者の方と距離を置きながらも、一緒にやるものだと思います。その他、タンザニアでの経験を生かして、TICAD IV の政策メッセージ案（社会開発、平和構築部分）作成のお手伝いをさせていただいたり、やりがいを感じる仕事をさせていただきました。

サセックス大学大学院開発学博士（PhD.）課程時代

以前からやりたいと思っていた博士課程に進むことに決め、母校で行うことにしました。テーマは、多数の貧困層が従事している農業状況を見てみたいと思い、JICA タンザニア事務所勤務時代に知った農業投入財補助金の貧困農家に対するインパクトについて調査してみたいと考えました。13年ぶりに訪れたサセックス大学は学生数も多くなり、特に中国人学生が大量に増えているのに驚きました。周りの田園風景も一部キャンパスになったところもありますが、のどかな風景がまだありました。博士課程は調査中心ですので、クラスに出る義務もなく、ひたすら自らの調査にまい進しました。研究の枠組みを作り、セミナーで発表してコメントをもらい、修正して、現地調査を1年かけて実施、帰国後データ分析、博士論文作成と様々なプロセスがあり、4年間があつという間に過ぎていきました。同じ博士課程の学生は私より若い人で、私のような年齢から博士課程を始める人は私が在籍していたときではまれでした。クラスは国際色豊かで欧米、中東、アジア、中南米から来ていました。4年間は長いプロセスでしたが、大学近くのブライトン・ホープの美しい海岸、街並みを楽しみながら、時を過ごしました。4年間は短いようにも長いようにも感じられましたが、国際的な開発の最近の議論に触れたこと、タンザニア農村での現地調査研究を行ったこと、多くの同じ道を志す友人を得たことはこの間の収穫でした。でも何よりもこの4年間で支えてくれた家族、特に夫に感謝しています。



タンザニア南部調査地域のメイズ畑

ア事務所勤務時代に知った農業投入財補助金の貧困農家に対するインパクトについて調査してみたいと考えました。13年ぶりに訪れたサセックス大学は学生数も多くなり、特に中国人学生が大量に増えているのに驚きました。周りの田園風景も一部キャンパスになったところもありますが、のどかな風景がまだありました。博士課程は調査中心ですので、クラスに出る義務もなく、ひたすら自らの調査にまい進しました。研究の枠組みを作り、セミナーで発表してコメントをもらい、修正して、現

地調査を1年かけて実施、帰国後データ分析、博士論文作成と様々なプロセスがあり、4年間があつという間に過ぎていきました。同じ博士課程の学生は私より若い人で、私のような年齢から博士課程を始める人は私が在籍していたときではまれでした。クラスは国際色豊かで欧米、中東、アジア、中南米から来ていました。4年間は長いプロセスでしたが、大学近くのブライトン・ホープの美しい海岸、街並みを楽しみながら、時を過ごしました。4年間は短いようにも長いようにも感じられましたが、国際的な開発の最近の議論に触れたこと、タンザニア農村での現地調査研究を行ったこと、多くの同じ道を志す友人を得たことはこの間の収穫でした。でも何よりもこの4年間で支えてくれた家族、特に夫に感謝しています。

仕事上の苦勞と喜び

グアテマラでもそうでしたが、特にタンザニアでは、様々な現地の方々の生活上の困難がうかがわれ、時に助けを乞われると、苦しい気持ちになることもありました。ただ、そうした時でも、別の時に見せるその国の人たちの笑顔と、彼らと様々な事柄について対話できた時に、喜びを感じました。異なる国、環境にある人々と、こうして話し合い、同じ目標に向かって共に働いたり、共に同じ問題について考えを深めたりすることが私にとって多くの喜びをもたらしてくれました。

終わりに

これまでの来し方を振り返り、様々な方々のお世話になったと感謝しております。特に結婚してからは、海外に出る仕事を理解してくれ、博士までやらせてくれた夫には感謝の一言で言い切れるものではありません。今後どのようなことをしていくのか模索中ですが、今までお世話になった多くの方々への感謝の気持ちを忘れないで生きたいと思えます。